

きゅうりからの贈り物

美作市立作東中学校

三年生 山本 翠

キッチンから包丁の音。母の声。

「見た目じゃ分からんもんやなあ。」

夏休みに入る少し前、スーパーで買ってきたきゅうりを手に、母はつぶやいた。鮮やかな緑色で全体にハリがあり、太さが均一で背筋がピンと伸びている。一見すると「美味しそう」な物なのに、切ってみると中に空洞があり黄色っぽく変色していた。本当だ。見た目では分からないものだ、と私も思った。

ん……見た目？……

「早く会いたいね。ママの大切な宝物。どんなことがあっても絶対に守ってあげるから。」

母の胎内で耳にしていたこの子守唄を、もちろん覚えてはい

ないが、たっぶりの愛情を受けて十五年。私は日々、成長している。当たり前をありがたいと感謝しながらも、年頃の思春期

真っ最中。鏡を見る度、ため息ばかりのにらめっこが始まる。

『ああ、もっと可愛くなりたいたい！小顔になりたい！身長だって高くなって、すらっと美脚になりたい！もっともっと……』

声にこそ出さないが、次から次へと欲望は止まらない。

「あの人みたいに生まれたかったなあ。」

ぐるぐると、頭の中を駆け巡った思考は、停止するとこの言葉を吐き出していた。

隣で洗濯物を取り出していた母は、

「その気持ち、分かるよ。」

共感しながらも、どこか淋しげに笑った。

「あんな見た目に生まれてたら、絶対人生変わったって！いなあ。うらやましい。」

高ぶった気持ちのまま軽々しくそう言った私。何かひらめいたように手を止める母。次の瞬間、いたずらな表情を見せながら、母は静かに言った。

「きゅうり。」

私は母の性格をよく知っている。風呂に入りながら、その言

葉の意味を考えた。答えを導き出すのに、そう時間はかからなかった。

『スーパのきゅうり……』

見た目は美味しそうなのに、中身が劣化していた、あのきゅうりのことだと確信した。母は何を言いたかったのか。きつこうだ。外見より中身。見た目だけにとらわれていると、本当に大切なものを見失うよ、と。

母の一言で、はっと目が覚めると同時に、すぐにその真意に気付いた自分に、少しだけ成長を感じた。

『あのきゅうりも、本当はメロンに生まれたかったのかなあ。』ふと、そんなことが頭をよぎる。同じ瓜科の食物でも、甘くて華やかで、高級な価値のあるメロンに。

確かに、どんな「物」にも第三者が決めた「優」とされる基準があり、価値があり、値段がある。消費者はそれらを「選ぶ」権利があり、お金で売買が成立する世の中の仕組み上、合理的であると言えるだろう。

では「人間」についてはどうか。何が「優」の基準となるのだろうか。

目鼻立ちがはっきりしていて小顔であること？、八頭身で手

足が長く、色白で細いこと？、勉強が得意で成績優秀であること？、お金持ちで社会的地位が高いこと？……

挙げてみると確かに納得。誰もがうらやむ「優」かもしれない。こうなりたい、と理想に向かって努力することも大切だろう。だが注目すべきはそこではない。それらを「もっていない」人間は「劣」なのか、何をもって価値とするのか、という点だ。

生まれながらにメロンでも、きゅうりを「劣」だとさげすむのか、相手の「優」に目を向けるのかでは大きく違う。また、自分はどうせきゅうりだからと、メロンの境遇をねたんでばかりいるのも同じ。何においても、どんな形でも、大切なのは己の「心」なのだ。

幼い頃、母に読んでもらった童話の中で、印象深いものがある。アンデルセンの『裸の王様』だ。洋服を自慢することが大好きな王様は、次々と新しいものを作らせ、贅沢な暮らしをしていた。ある日、詐欺師の仕立て屋が来て、愚か者には見えないう布で、この世で一番珍しい服を作りましょう、と提案する。実在しない服を身にまとう王様。愚か者だと思われたくない人々は皆、「見えない」と言い出せず、その姿を褒め称えた。

何も着ていないことを指摘した純真な子どもの声に、一同が真意に気付き、愚かさを確信するという内容だ。

この物語は「人としての価値」の核心をついている気がする。そもそも、王様という地位につくだけで、「優」なのか。豪華に着飾り、必要のない贅沢をし、価値の分からないものを高値で買う。もしこの王様に、自分の頭で考え、本質を見極める目があれば……。民のためとなる生活を最優先に考える心があれば……。

人は誰しも、自分が価値のある人間だと思いたいものだが、実質以上に見せようと虚栄心にとらわれると、真実も、大切なものさえも見失ってしまう。たとえ誤ちを犯してしまったとしても、自分には愚かな一面もある、と素直に認め、悔い改める謙虚さをもっていたとしたら……。自ずと結果は変わっていただろう。

社会的地位にも富にも恵まれたこの王様は、正面だけを見れば「優」なる人物かもしれない。だが、家臣が忠義を尽くすような、民に愛されるような「心」をもち合わせてはいなかった。これは人として、幸せだと言えるだろうか。私にはそうは思えない。やはり幸せに生きる鍵は「心」にあるのだ。

生命は、誕生の形を選べない。何に、どこに、いつ、どうやって生を受けるのか。誰にも決めることはできない。その中で私たちは、いくつもの奇跡を経て「心」をもった「人間」として、今を生きている。だからこそ、与えられた生命を全うしなければならぬ。母の子守唄のように、誰かに望まれ守られ生まれきた私たちは、感謝の意をもって幸せに生きるべきなのだ。

人間の価値を決める基準があるとするならば、それはきっと「心の豊かさ」だろう。個を認め、敬い、受け入れる。一人一人が「豊か」になれば、異を排除する者も、弱きを攻撃する者もいなくなるのに。

目を閉じて心で感じる。心の目で見て、心の声を聞く。豊かな心を育むために、目を向けるべきを「見る」のだ。一人一人が……。そう願わずにはいられない。

幸せに生きられるかどうかは、私の「心」にかかっている。どんな逆境にも負けない、強く豊かな心をもって生きていこう。そう、改めて決意した夏。負けるな、私！

あの日のきゆうりに感謝を込めて。